第2章

感情表出の制御の測定

第２章　感情表出の制御の測定

第２章では，青年の感情表出の制御を測定するためにまず，基礎的資料として青年の感情表出の制御を行う場面を収集し，それを基に感情表出の制御を測定するための尺度を作成する。

第１節では，大学生を対象とし，感情表出の制御を行った経験についての資料を収集し，整理した。その中でもネガティブ感情表出の制御に焦点を合わせ，感情表出の制御を測定するための質問紙を作成する。

第２節では，中学・高校生を対象にポジティブおよびネガティブ感情表出の制御の両方を測定できる新版感情表出の制御尺度を作成する。

第１節　感情表出の制御尺度の作成［研究 1］

感情表出の制御と一口にいっても，その内容や場面はさまざまである。これまでは，仮想場面を用いた研究にせよ，観察研究にせよ，感情表出の制御の分類は Gnepp & Hess (1986)のものが唯一であった。すなわち，自分が得するためや自尊心を維持するためという自己保護的動機による感情表出の制御と，相手への考慮や相手との関係の維持および規範の維持という向社会的動機による感情表出の制御である。

青年には幼児や児童より複雑な場面が存在することが十分に考えられる。それゆえ，青年を対象に感情表出の制御の事例を広く収集し，感情表出の制御の測定を行う必要がある。

1．感情表出の制御に関する予備的調査［研究 1-1］

目的

感情表出の制御は形式的，機械的に決められた社会的表示規則に単純に従う場合のみではく，複雑な要因が絡み合っていることが指摘されてきた。このように複雑で多様な感情表出の制御の全体図を把握すべく，大学生を対象に感情表出の制御に関する研究を進めていくための基礎的なデータを収集し，感情表出の制御を行う対象と場面はどのようなものがあるかについて検討し，研究 1-2 以後の研究の資料として用いる。

方法

被調査者　4 年制国立大学の男女大学生，合計 154 名（男子 67 名，女子 87 名）。

調査内容　感情表出の制御を行う場面を設定するため，感情表出の制御を行った経験について尋ねた。感情表出の制御を行う場面について，感情表出の制御の 4 つの方略である強調化（実際より，感情を強めて表すこと），最小化（実際より，感情を弱めて表すこと），中立化（ポーカフェースで感情を隠すこと），置き換え（別の感情に置き換えること）の例を提示し，わかりやすくした上で，4 つの方略のそれぞれについて，1 項目ずつ自由記述で回答してもらった。

調査方法　授業時間中に，集団で実施された。

結果と考察

154 名の大学生から得られた「感情表出の制御を必要とする場面」に関する項目は合計 447 項目で，その中にそれぞれ，強調化に関する項目（91），最小化（114），中立化（131），置き換え（122）があり，感情表出の制御を行う相手・感情の種類別に分類した結果が Table2-1 に示されている。最も多く行われている感情表出の制御は友人との関係におけるネガティブ感情表出の制御であった。

まず，感情表出の制御を行う場面を感情の種類別に分類した結果，ポジティブ感情が 79，中立的感情が 27，ネガティブ感情が 341 場面であった。この結果から，感情表出の制御を行う場面の中にはネガティブ感情を制御し表わす場面が最も多いことが示された。

Table 2-1　感情表出の制御における相手別・感情の種類別分類 (数字は頻度)

	ポジティブ感情	中立的感情	ネガティブ感情	Total
友人との関係	39	18	220	277
学校・クラスでの関係	32	0	24	56
不特定の人との関係	1	0	29	30
家族や親戚との関係	1	2	21	24
異性関係	2	6	14	22
部活動での関係	4	1	15	20
仕事上の関係	0	0	18	18
Total	79	27	341	447

次に，相手別に分類した結果，7つに大別され，感情表出の制御を行った相手として記述が多かったのは，友人との関係，学校・クラスでの関係，不特定な関係，家族や親戚との関係，異性関係，部活動での関係，仕事上の関係の順であった。

さらに，相手別・感情の種類別分類をしてみると，友人との関係におけるネガティブ感情表出の制御が最も多く行われていることが示された。

2. ネガティブ感情表出の制御尺度の作成［研究 1-2］

目的

研究 1-1 の結果から感情表出の制御の中でも，私たちが日常生活において表出の制御の対象とする感情は，怒りや失望，悲しみといったネガティブ感情が圧倒的に多いことが明らかにされた。このことと対応し，これまでの感情と表出に関する研究でも，ネガティブ感情表出の制御の発達に関する研究（Underwood, Coie, & Herbsman, 1992），ネガティブ感情経験の第三者への開示と健康との関連に関する研究（Tayler, Bagby, & Parker, 1991）など，ネガティブ感情を扱うものが多く，心理学的観点からネガティブ感情表出の制御を研究することの重要性が指摘されている。ここでは，感情表出の制御の中でもネガティブな感情表出の制御に焦点を合わせ，大学生を対象に感情表出の制御尺度を作成することにする。

方法

被調査者　4年制国立大学，私立大学の男女大学生，合計 311 名（男子 126 名，女子 185 名）。

調査内容　ネガティブ感情表出の制御を測定する質問紙：まず，研究 1-1 で得られた総 447 項目を，KJ 法によって整理し，結果的に 48 項目にしぼった。次に感情表出の制御における先行研究（平林，1992）から，ネガティブな気持ちを隠そうとする項目を 15 選びだした。以上の方法により，計 63 項目を収集した。その内容的妥当性を検討するために，心理学の大学教官 1 名と心理学専攻の大学院生 2 名による検討を行い，適切でないと判断される項目について修正または削除を行った。その結果，58 の項目が残された。回答形式は 5 件法を採用しており，「ほとんど当てはまらない」から「多いに当てはまる」までの 5 段階に対して 1 点~5 点を与えた。

調査方法　調査は，授業時間中に集団的に実施し，所要時間は約 20 分であった。感情表出の制御に関する質問紙とともに 3 つの各尺度を実施した。

結果と考察

(1) 感情表出の制御の因子分析

感情表出の制御に関して得られた 58 項目に対して因子分析を行った。主成分法により因子を抽出したところ，固有値が 1 以上の因子は 14 因子が得られたが，固有値の大きさおよび因子の解釈のしやすさの観点から 5 因子を抽出した。これらの因子に対してバリマックス回転を実施した。回転後の各項目の因子負荷量を検討した結果，2 つ以上の因子に対して高い負荷量を有している項目が認められたので，これらの項目を除外し，残った項目に対して因子数を 5 に指定して，再度因子分析を行った結果が Table2-2 に示されている。1 つの因子に対して.50 以上の負荷を持つ項目をその因子を構成する主な項目とした。この結果に対し，感情表出の制御場面と動機の観点から，つぎのように各因子の解釈を行った。

Table 2-2　感情表出の制御に関する質問項目と因子分析結果

	項　　目	F1	F2	F3	F4	F5	h^2
44.	友人が，私の家の冷蔵庫のドアを開けたままにしたので，中の食物が食べられなくなってしまった時，腹が立ってしょうがないのに笑顔で「大丈夫」と言う。	.71	.09	.10	.04	.06	.53
51.	友人が私の服を汚した時，謝りもしなかったので頭にきたが，あたかも怒っていないように笑顔を見せる。	.63	.26	.12	.08	.00	.48
45.	頭痛がひどいのに，友人がふざけて頭をたたいたとき，腹が立つが，笑ってしまう。	.60	.07	.24	.04	.04	.43
40.	友人が足を踏みつけても，素直に謝ろうとしていないので，怒りが込み上げてくるが，友人には笑顔を見せる。	.60	.24	.19	.04	.08	.47
39.	友人が私に貸りたものをいつまでも返してくれないので，腹が立つが，友人には笑顔で「いつでもいいよ」と言う。	.53	.25	.05	.16	.03	.38
28.	友人が勝手なことを言って腹が立つが，その気持ちをまったく見せない。	.35	.61	.08	.00	.11	.52
24.	友人から意地悪をされて腹が立つ時，その友人にはその気持ちを見せないでふるまう。	.30	.56	.05	.00	.04	.41
26.	みんなと会話をしている時，急に友人から自分の欠点を指摘され腹が立つが，その気持ちを見せないでふるまう。	.14	.54	.10	.22	.10	.38
35.	友人にプライバシーのことをうるさく言われて腹が立つが，その気持ちを見せないで会話をする。	.43	.52	.07	.03	.00	.46
41.	友人が自分に気にしていることを言ってくる時，嫌いであるのに，その気持ちを見せないでふるまう。	.33	.52	.10	.06	-.02	.39
7.	友人が体調を崩し，みんなが心配している時，自分はあまり心配していないのに，心配そうにふるまう。	.11	.15	.67	.00	-.08	.50
18.	友人が他の友達のはまった不幸について私に話してくれた時，ほとんど心が動かなかったが，心配しているようにふるまう。	.08	.16	.64	.09	.07	.46
16.	友人の親がなくなってしまい，そのことを私に話してくれたとき，それほど悲しいと思わなかったが，悲しそうにふるまう。	.01	.01	.60	.12	.05	.38
3.	友人から事故を起こしたことを聞いた時，それほど悲しいと思わないが，悲しそうにふるまう。	.10	.08	.54	.00	.01	.31
50.	友人４人で食事にいく約束をしたが，そのうちの1人が恋人との約束を優先して断わってきた時，むっとしたが，「楽しんでおいでよ」と言って送る。	.12	.07	.14	.55	.00	.35
56.	誕生日に友人から貰ったプレゼントが，すでにもっていたものと同じなのでがっかりしたが，笑顔で受け取る。	.10	.01	.10	.55	-.04	.32
54.	友人が結婚することになって，嬉しい気持ちよりもさびしい気持ちが強い時，すごくうれしそうに祝福する。	.12	.01	.00	.53	.02	.29
27.	友人の相談役をしていて友人の話しが悲しかった時，あまり悲しそうにふるまうのは照れ臭いので，あまり悲しくないようにふるまう。	-.02	.12	-.06	-.02	.56	.34
21.	友人と映画を見にいって，自分だけ悲しくて涙がでそうになったとき，照れ臭いので，こらえて悲しくないようにふるまう。	.00	.21	.00	-.04	.53	.33
8.	友人がちょっとした事故に会った時，心配になったが，照れくさいのであまり心配していないようにふるまう。	.03	-.10	.09	.03	.50	.27
	二　乗　和	2.49	1.84	1.70	1.00	.89	
	寄　与　率 (%)	12.94	9.37	8.54	5.00	4.49	40.34

注）F1は「物理的被害場面での向社会的動機」，F2は「言語的被害場面での向社会的動機」，F3は「友人の不幸経験場面での向社会的動機」，F4は「友人の幸福・満足と関わる場面での向社会的動機」，F5は「体面の気になる場面での自己保護的動機」を指す。

・第1因子："友人が，私の家の冷蔵庫のドアを開けたままにしたので，中の食物が食べられなくなってしまった時，腹が立ってしょうがないのに笑顔で'大丈夫よ'という"や"友人が私の服を汚した時，謝りもしなかったので頭にきたが，あたかも怒っていないように笑顔を見せる"などの項目に高い因子負荷を示している。友人から物理的被害を受けた場面で生じた怒りを制御して表す項目から構成されており，怒りを表すことによって気まずい雰囲気や関係になることを避け，これまでの関係を守りたいという向社会的動機と考えられるので，「物理的被害場面での向社会的動機による感情表出の制御」と命名する。

・第2因子："友人が勝手なことを言って腹が立つが，その気持ちをまったく見せない"や"友人から意地悪をされて腹が立つ時，その友人にはその気持ちを見せないでふるまう"などの項目に高い因子負荷を示している。友人から言語による被害を受けた場面で生じた怒りを制御して表す項目から構成されており，その動機は第1因子と同様，友人との関係が悪化することを避けたいという向社会的動機と考えられるので，「言語的被害場面での向社会的動機による感情表出の制御」と命名する。

・第3因子："友人が体調を崩しみんなが心配している時，自分はあまり心配していないのに心配そうにふるまう"や"友人が他の友人の陥った不幸について私に話してくれた時，ほとんど心が動かなかったが心配しているようにふるまう"などの項目に高い因子負荷を示している。友人が不幸に陥った場面で生じた感情（無関心や弱い心配）を制御して表す項目から構成されており，このような場面で無関心だったり，あまり心配にならないことをそのまま表すことは，'不幸に会った人には悲しさを表すべき'という社会的表示規則に違反している。その動機としては，社会の道徳的・倫理的な基準に従おうとする向社会的動機と考えられるので，「友人の不幸経験場面での向

社会的動機による感情表出の制御」と命名する。

・第4因子：“友人4人で食事に行く約束をしたが，そのうちの1人が恋人との約束を優先して断ってきた時，むっとしたが楽しんでおいでよと言って送る”や“誕生日に友人から貰ったプレゼントが，すでに持っていたものと同じなのでがっかりしたが，笑顔で受け取る”などの項目に高い因子負荷を示している。友人が幸福や満足を感じる場面で，むっとしたりがっかりしたりする感情を制御して表す項目から構成されており，相手の立場を考慮した上で，相手の良い感情を阻害したくないという向社会的動機が考えられるので，「友人の幸福・満足と関わる場面での向社会的動機による感情表出の制御」と命名する。

・第5因子：“友人の相談役をしていて友人の話が悲しかった時，あまり悲しそうに ふるまうのは照れくさいので,悲しくないようにふるまう”や“友人と映画を見に行って自分だけ悲しくて涙が出そうになった時，照れくさいので，こらえて悲しくないようにふるまう”などの項目に高い因子負荷を示している。感情的になっている自分を見せるような照れくさいことをして，体面を害するのではないかと気になる場面で，自分の悲しさなどを制御して表す項目から構成されている。その動機としては，普段の自分の姿を崩したくないという自己保護的動機が考えられるので，「体面の気になる場面での自己保護的動機による感情表出の制御」と命名する。

以上，感情表出の制御を行う場面と動機の観点から，5つの因子が認められた。Gnepp & Hess (1986) は，向社会的動機と自己保護的動機の2つの動機を見出している。本研究と Gnepp & Hess (1986) の動機を比較すると，Gnepp & Hess (1986) の向社会的動機は本研究では第1因子の「物理的被害場面での向社会的動機」，第2因子の「言語的被害場面での向社会的動機」，第3因子の「友人の不幸経験場面での向社会的動機」および第4因子の「友人の

幸福・満足と関わる場面での向社会的動機」に分かれたと言えよう。他方，Gnepp & Hess（1986）の自己保護的動機は，本研究では第5因子の「体面の気になる場面での自己保護的動機」に相当すると言えよう。このように，大学生においてはGnepp & Hess（1986）の感情表出の制御の向社会的動機がより多様な場面で存在することが明らかにされた。

各因子ごとにα係数を求めたところ，第1因子が，.79，第2因子が，.76，第3因子が，.72，第4因子が，.58，第5因子が，.50であった。第4，第5因子の数値がやや低いが，その他の因子ではある程度の値が得られた。内的一貫性が認められたと言えよう。

(2) 各因子の平均（SD）と性差

前項で得られた因子について，各因子の尺度得点の平均（SD），因子間相関およびt検定による性差を調べた（Table2-3）。各因子の中で最も得点が高いのは，第4因子の「友人の幸福・満足と関わる場面での向社会的動機」で，次が第2因子の「言語的被害場面での向社会的動機」で，最も得点が低いのは第5因子の「体面の気になる場面での自己保護的動機」による感情表出の制御であった。各因子間相関の結果からは，第1因子と第2因子の間に比較的高い相関が見られ，2つ因子間には共通性が大きいと言えよう。また，第5因子は，第2因子を除いたどの因子とも有意な相関がなく，第2因子とも低い相関が見られるなど，感情表出の制御の中でも第5因子は他の因子とやや異なる性質を持っていると考えられる。

次に，性差については，第5因子の「体面の気になる場面での自己保護的動機」で，男子が女子より感情表出の制御を多く行っていることが認められた。他の4つの因子においては，第4因子の「友人の幸福・満足と関わる場

Table 2-3　感情表出制御の各因子ごとの平均(SD),因子間相関係数および性差

因子名	平均(SD)	F2	F3	F4	F5	性差		
						男子		女子
物理的被害場面での向社会的動機(F1)	2.67 (.96)	.59 ***	.28 ***	.24 **	.06	2.40	<<	2.84
言語的被害場面での向社会的動機(F2)	2.98 (.92)	—	.26 ***	.20 **	.13 *	2.80	<<	3.09
友人の不幸経験場面での向社会的動機(F3)	2.90 (.95)	—	—	.17 **	.02	2.72	<<	3.01
友人の幸福・満足と関わる場面での向社会的動機(F4)	3.91 (.83)	—	—	—	.05	3.85		3.85
体面の気になる場面での自己保護的動機(F5)	2.37 (.89)	—	—	—	—	2.62	>>	2.18

注 1）各因子は，実際は下位尺度であるが，便宜上，上のように表記する。

2）*p<.05，**p<.01，***p<.001

3）>>はt検定による有意水準（<<：p<.01　）

面での向社会的動機」を除いた3つの因子において，女子が男子より感情表出の制御を多く行うことが示された。そして，第4因子「友人の幸福・満足と関わる場面での向社会的動機による感情表出の制御」は，男女ともに感情表出の制御を同程度に行う場面であった。

以上の結果から，第4因子「友人の幸福・満足と関わる場面での向社会的動機」による感情表出の制御は男女問わず最も多く行われる感情表出の制御であり，相手の幸福・満足感を壊さないように，自分の本当の感情を別のものに置き換えて表すことは，青年の友人関係において社会的ルールのように強く求められるものと考えられる。第1因子「物理的被害場面での向社会的動機」，第2因子「言語的被害場面状況での向社会的動機」，第3因子「友人の不幸経験場面での向社会的動機」においては，女子のほうが男子より感情表出の制御を多く行った。落合・佐藤（1996）によれば，青年の友達とのつきあい方の特徴として，女子はだれとでも仲良くし，みんなと同じようにしようとし，みんなから好かれることを願っており，男子は自分に自信をもって交友する自立したつきあい方を志向しているという。このような男女のつきあい方の違いを考慮すると，女子が男子より物理的・言語的被害場面や友人の不幸経験場面で向社会的動機のために感情表出の制御を多く行うことが首肯されよう。

また，第5因子「体面の気になる場面での自己保護的動機」においては男子が女子よりネガティブ感情表出の制御を多く行うことが示された。この結果は，男子は勇敢でたくましくあるべきという男性性のイメージから，悲しさや心配のような感情をはっきり表すことは男らしくないといったような性役割意識が影響していると考えられる。

各因子間相関の結果からは，第1因子と第2因子の間に比較的高い相関が見られ，2つ因子間には共通性が大きいと言えよう。また，第5因子は，第2

因子を除いたどの因子とも有意な相関がなく，第２因子とも相関が低いなど，感情表出の制御の中でも第５因子は他の因子とやや異なる性質を持っていると考えられる。

研究１の要約

大学生を対象とした本研究では，主に幼児や児童を対象にした先行研究で使用された感情表出の制御とは異なる感情表出の制御が存在すると予測し，感情表出の制御を行う多様な例を収集し，検討を行った。収集された質問の回答に対し因子分析を行った結果，感情表出の制御を行う場面と動機の観点から，５つの因子が認められた。

さらに各因子別に感情表出の制御の使用の性差が存在することを明らかになり，性役割意識が感情表出の制御に影響している可能性があることが示唆された。

第２節　新版「感情表出の制御尺度」の作成［研究2］

研究１で作成された質問紙は大学生を対象としており，これまでのGnepp & Hess（1986）の感情表出の制御の場面よりも多様な動機と場面が存在するという予測のもとで検討を行った結果，５つの因子が得られた。具体的には「物理的被害場面での向社会的動機」，「言語的被害場面での向社会的動機」，「友人の不幸経験場面での向社会的動機」，「友人の幸福・満足と関わる場面での向社会的動機」，「体面の気になる場面での自己保護的動機」による感情表出の制御の５つである。

また，平林・柏木（1993）は，感情表出の制御を行う場面が多様であり，分類する必要があると指摘しながら，小学生と中学生を対象にした調査でポジティブ感情とネガティブ感情において動機を中心にそれぞれ４つの因子を抽出し，仲間からの評価と感情表出の制御との関連を調べた。感情表出の制御の測定に使われた場面はポジティブ感情の場合は，「相手への配慮」，「自分が得をするため」，「照れ隠し，ネガティブな結果を避ける」，「社会的・道徳的規範の維持」の４パターン，ネガティブ感情の場合は，「周囲への配慮」，「自尊心の維持」，「社会的・道徳的規範の維持」，「相手の意図への配慮」の４パターンに分類している。

これらの研究で用いられているような場面想定式質問紙は，被調査者が場面を具体的に想像しやすいというメリットがあるが，各因子（各パターン）において１つの場面が使用されており，個々の場面が具体性をもっているので，感情表出の制御を全体的にとらえる際に場面の影響が大きいことが問題になりうる。また，従来の場面想定式の質問紙には１つや２つの場面しか用いていないので感情表出の制御の複雑な性質を説明しきれないという限界がある。すなわち，これまでの感情表出の制御の測定には場面の代表性の問題

や各場面の影響力の大きさの調整が困難であるという限界があると考えられる。たとえば，平林・柏木（1992）のネガティブ感情表出の制御の中で「自尊心の維持」のための感情表出の制御の場面をみてみると，「学校で，難しい算数の宿題が出て，ミホちゃんはやっと３時間もかけてそれを終わらせたのに，友人のカズミちゃんに『昨日の宿題簡単だったね』と言われました。ミホちゃんは自分のできの悪さにがっかりしました。」という場面が使われている。すなわち，この場面は「自尊心の維持」のために感情表出の制御を行う代表的な場面として用いられており，仲間からの評価と感情表出の制御との関連を調べた結果，学年によっては，自尊心の維持のために感情表出の制御を多く行う子どもは仲間からの評価の低いことが明らかにされた。

しかし，子どもによっては“算数は好き嫌いがあるし，カズミちゃんよりミホちゃんの方ができる科目もあるだろうからがっかりしたとしても大した失望じゃない”と思って「感情表出の制御を少なく行う」と応えた子どももいるであろう。さらには，ミホちゃんが自分にがっかりしていることをカズミちゃんに言ったら，カズミちゃんが「昨日の宿題簡単だったね」と言ったことに対し，すまないことをしたと思うかも知れないので，言わないのかも知れない。すなわち，自尊心の維持という理由で感情表出を制御するのではないかも知れない。または，場面が算数の宿題のかわりに「ミホちゃんは昨日弟とトランプをして負けた。学校にいったらカズミちゃんが『昨日，妹とテレビゲームをやって勝ったの』と言われ，がっかりした」という場面を想定してみよう。この両場面でのがっかりの程度は異なる可能性が大きい。このように，具体的場面を用いた研究では，場面によって同じく自尊心の維持を測っていても影響力の大きさに違いがあり，他の因子との関係においても場面の影響力の大きさのバランスをとることは難しいので，場面の代表性や影響力の大きさの調整が困難であるという限界が考えられる。

このような問題を最小限にするために，研究1では自由記述などによる多様な例を収集し，複数の場面想定式の質問項目で1つの下位尺度を構成するような質問紙を作成した。具体的な例を挙げると，第2因子の「言語的被害場面での向社会的動機による感情表出の制御」の場合，「友人が勝手なことを言って，腹が立つが，その気持ちをまったく見せない」，「友人から意地悪をされて腹が立つ時，その友人にはその気持ちを見せないでふるまう」，「みんなと会話をしている時，急に友人から自分の欠点を指摘され腹が立つが，その気持ちを見せないでふるまう」などの5つの項目で構成されている。さらに，同じような場面での感情表出の制御であっても，その動機は個人によって，様々であることが予想されるため，因子の命名において一般性がもてるように工夫を行った。その結果，代表性の問題や各場面の影響の大きさの問題はある程度和らげることができたが，これらの問題を完全に解消することはできず，課題が残された。この質問紙を用いた研究の結果，ネガティブ感情表出の制御は場面および動機によって，感情表出の制御と精神的健康および友人関係の満足感との関連性に違いが見られるものの，ネガティブ感情表出の制御を多く行う人は低い自尊感情，高い抑うつ傾向，低い友人関係の満足感を持っていることが示唆された（崔・新井，1998）。このように，場面想定式の質問紙による研究の展開として感情表出の制御が持つ意味についての実証的検討においても，この質問紙の有用性を示唆するデータは得られている。

しかし，研究1の質問紙は研究に使用された場面の代表性や影響力の大きさの問題以外にも，次のような課題を残している。第1にそれは，それぞれの因子に含まれる質問文の中に共通した表現が多く見られることである。例えば「笑顔を見せる」や「見せないでふるまう」などで，このような同一の表現が回答に影響した可能性があることである。第2は，表出の制御を行う

感情がどこで生じたものかが考慮されていないことである。たとえば，第 1 因子と第 2 因子はやりとりの相手である友人の言動に対して自分の中に怒りが生起した場合であり，第 3 因子は友人の中に生じている感情と友人の問題に対し自分の中で生じている悲しい感情が混ざっており，第 4 因子は友人に対し自分の中で生じたがっかりした感情や寂しくなった気持ち，第 5 因子もやはり友人の問題に対し自分の中に生じた悲しさや心配などを制御する場面というふうにである。すなわち，友人とのやりとりにおいて，その友人に対し自分の中に生じた感情を制御するか，または友人自身の中で生じた感情に同情するために自分の感情を制御するかによって，経験した感情を表出するかどうかにも大きな影響を及ぼすであろうし，感情表出の制御と内的・社会的適応感との関連性においても違った影響を与えることが予測できる。

上述したような問題点を考慮した感情表出の制御の測定の開発を本研究は行った。これによって，最近青年の人間関係の希薄化の 1 つの症状として指摘されている「感情表出の制御」の傾向や他の問題行動との関連性などを敏感にとらえることが期待される。

まとめると，本研究では，1) 具体的な場面を提示しないで，各自の自由な想定ができ，2) 感情がどこに起因しているのかを意識した「感情表出の制御」尺度を新たに作成し，その信頼性および妥当性を検討することを目的とする。なお，本尺度は中学生と高校生にも使用できるものとするとともに，ポジティブ感情表出の制御をも加えた尺度を作成する。

1. 新版「感情表出の制御尺度」の作成［研究 2-1］

目的

中学・高校生の感情表出の制御を測定する項目を作成し，その尺度の信頼性および妥当性を検討する。あわせて，中学生と高校生の感情表出の制御の態様を明らかにすることを目的とする。

方法

被調査者　首都圏の公立中学校2校，1年生154名（男子130名，女子24名），2年生204名（男子161名，女子43名），3年生179名（男子146名，女子33名），首都圏の公立高等学校1校　1年生81名（男子52名，女子29名），2年生211名（男子156名，女子55名），3年生123名（男子92名，女子31名）。なお，高校は学力的に「中の上」のレベルと考えられる。

調査内容　感情表出の制御尺度の項目は，1）感情の種類および 2）感情表出の制御の方略の2つの次元の組み合わせによって作成された。このような2つの次元を設けた理由としてまず，感情は大きくポジティブ感情やネガティブ感情に区分することができ，同じポジティブ又はネガティブ感情のなかであっても，その種類によって表出の制御を行う程度や制御後の適応感（内的・社会的）との関連性に違いが現れることが予想されるからである。Shaver, Schwartz, Kirson, & Olconnor（1987）は，多様な感情語を収集し，それを感情の評価（ポジティブかネガティブか），強度（強いか弱いか）のカテゴリーを設け，分類を試みた。ポジティブ感情は好感，喜び，驚きで，ネガティブ感情は恐怖（不安），悲しさ，怒りの全6つでカテゴリー化された。この中で驚き（surprise）は，日本では欧米文化とは異なり，中立的な感情として扱われることが多く，またShaverらが意図した驚きの表出を制御する場面が実際に少ないことから，驚き（surprise）を除き，その代わりに表出の制御を多く行うことになると思われる嫌悪を追加することにした。これは心理

学の教官１人と大学院生１人の話し合いによって決定された。

次に，感情表出の制御の方略を大別して考えると，実際に生起している感情を隠したり，他の感情を表したりする抑制と実際に生起していない感情や弱い感情を強めて表す強調化の２つに分類できる。

以上，６つの感情の種類それぞれに対し，２つの方略を用いる感情表出の制御を組み合わせて，12 項目が作成された。さらに本研究では，日常生活の中で制御を行う感情の生起が誰のものかについて，やりとりの相手である友人に対し自分の中に生起した感情を制御する場合と，やりとりの相手の感情に同調するために自分の感情を制御する場合の両方が重要であると判断し，感情がどこで生じているかという観点を取り入れた。結局感情表出の制御を測定するための質問項目は，感情の種類 (6)×方略 (2)×感情の生起場所 (2)で，計 24 項目が作成された。「感情表出の制御」尺度は５件法を採用しており，「あてはまらない」から「あてはまる」までの５段階に対して１点～5 点を与えた。

調査方法　各学級で HR の時間または授業時間に一斎に行われたが，一部の学校に対しては，授業時間などの都合で，自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

(1) 感情表出の制御の因子分析

まず，中学生と高校生を合わせて感情表出の制御の 24 項目に対し因子分析を行った。主成分法により因子を抽出したところ，固有値が１以上の因子として 5 因子が得られた。これらの因子に対しバリマックス回転を実施し，２つ以上の因子に高い負荷量を有している項目を３項目除いた 21 項目に対し，

再度因子分析を行った結果をTable2-4に示している。それぞれの因子の解釈と命名は以下の通りである。

・第1因子：やりとりの相手の友人に合わせて喜びや好感，悲しさなどの比較的に弱いポジティブおよびネガティブ感情を強調して表わす内容と，やりとりの相手の友人の言動に対し，自分がそれほど感じていないポジティブ感情および比較的弱いネガティブ感情を強く表す内容の感情表出の制御である。積極的に相手にポジティブな印象を持っていることをアピールして，友人と仲の良い楽しいお付き合いをしようとする内容の制御であると考えられるため，「八方美人的感情表出の制御」と命名する。以下「八方美人的制御」と命名する。

・第2因子：やりとりの相手の友人に対し自分がもつネガティブ感情を実際感じている感情より強く表す内容と，相手の友人に対し自分の中で生じているポジティブ感情を表さない内容から構成されている。ここでの感情表出の制御は常に相手の友人に対してネガティブ感情ばかりを表現することになり，親密な人間関係になりにくい感情表出の制御であると考えられるため，「非仲間志向的感情表出の制御」と命名する。以下「非仲間志向的制御」と命名する。

・第3因子：やりとりの相手の友人に対し自分の中で強く感じている怒りやイライラなどのネガティブ感情を表さないように抑制している内容から構成されている。友人に対し怒りや嫌悪の感情が生起しているのに，それを抑圧する感情表出の制御であるため，「自己抑圧的感情表出の制御」と命名する。以下「自己抑圧的制御」と命名する。

・第4因子：やりとりの友人の中の感情に対し，自分はそれとは異なる好感や嫌悪などポジティブおよびネガティブ感情を持っているのに，友人に合わせるため自分の感情を表さないように抑制する内容から構成されている。第

Table 2-4　感情表出の制御（新版）に関する質問項目と因子分析結果

項目	全体 F1	全体 F2	全体 F3	全体 F4	全体 F5	全体 h^2	中学生 F1	中学生 F2	中学生 F3	中学生 F4	中学生 F5	中学生 h^2	高校生 F1	高校生 F2	高校生 F3	高校生 F4	高校生 F5	高校生 h^2
1 友人がとても嬉しいと言うこと（もの）に対し，自分はそれほど嬉しく思わない時，私もかなり嬉しそうに表す．	.57	.03	.11	.19	.07	.39	.55	.08	.16	.16	.11	.39	-.08	.51	.02	.33	.04	.39
6 友人がとても悲しいと言うこと（もの）に対し，自分はそれほど悲しいと思わない時，私もかなり悲しそうに表す．	.53	.00	.10	.06	.13	.35	.55	.03	.15	.13	.13	.37	.00	.46	-.01	.32	.18	.35
2 友人がとても好きだということ（もの）に対し，自分はそれほど好きでないとき，私もかなり好きなように表す．	.52	.10	.05	.33	.11	.41	.50	.10	.08	.29	.16	.39	.08	.54	.04	.42	.00	.49
8 友人の言動に本当はそれほど悲しいと思わないのに，とても悲しそうに表すことが多い．	.52	.21	.15	.08	.14	.38	.52	.21	.16	.10	.13	.38	.19	.55	.14	.06	.11	.39
7 友人の言動について本当はそれほど好感を持っていないのに，とても好感を持っているように表すことが多い．	.50	.15	.32	.08	.14	.42	.46	.16	.33	.12	.13	.39	.09	.60	.31	.02	.17	.51
5 友人の親切な行動について本当はそれほど嬉しいと思わないのに，とても嬉しそうに表すことが多い．	.43	.03	.24	.06	.07	.26	.40	.00	.30	.11	.04	.27	.04	.50	.13	-.01	.10	.29
3 友人の言動について本当はそれほどイライラしていないのに，とてもイライラしているように表すことが多い．	.18	.76	-.06	.06	.07	.64	.18	.76	-.05	.05	.05	.63	.78	.19	-.08	.05	.15	.70
4 友人の行動に本当はそれほど怒りを感じないのに，とても怒っているように表すことが多い．	.13	.75	.05	.04	.11	.61	.13	.75	.03	.07	.10	.61	.72	.11	-.10	-.01	.16	.58
9 友人の言動が本当はそれほど嫌いでないのに，とても嫌っているように表すことが多い．	.21	.55	.02	.07	.12	.38	.23	.53	.04	.05	.09	.35	.59	.17	.02	.07	.18	.42
1 友人のやさしい言葉が本当は嬉しいのに，自分の嬉しい気持ちを表さないことが多い．	.06	.51	.10	.15	.04	.31	.05	.49	.10	.16	.08	.30	.58	-.06	.10	.07	-.02	.37
3 友人のいいところに本当は好感を持っているのに，好感の気持ちを表さないことが多い．	.04	.36	.16	.22	.08	.23	.04	.34	.16	.27	.10	.23	.40	-.05	.18	.09	.02	.21
2 プライドを傷つける友人の言葉に本当は腹が立つのに，怒りの感情を表さないことが多い．	.11	.03	.66	.11	.04	.47	.13	.05	.63	.08	.05	.43	.01	.06	.72	.13	.04	.55
1 友人の誠意のない言動に本当は悲しいのに，悲しみを表わさないことが多い．	.11	.09	.58	.16	.04	.40	.13	.08	.57	.17	.04	.39	.12	.07	.60	.12	.05	.41
4 友人の言動にどイライラしているのに，イライラの気持ちを表さないことが多い．	.15	.04	.55	.19	.08	.37	.15	.04	.55	.18	.11	.38	.02	.10	.56	.18	.04	.37
5 迷惑をかける友人を本当は嫌だと思っているのに，嫌な気持ちを表さないことが多い．	.26	.02	.54	.05	.00	.37	.24	.02	.55	.06	.02	.37	.02	.30	.52	.04	.04	.38
7 友人が気に入らないということ（もの）に対し，自分は嬉しく思っているとき，私は嬉しい気持ちを表さない．	.23	.04	.15	.54	.12	.39	.27	.07	.17	.50	.15	.39	.02	.08	.14	.58	.11	.39
8 友人が嫌いだと言うこと（もの）に対し，自分はけっこう好きなとき，私は自分の好感の気持ちを表さない．	.19	.15	.12	.48	.18	.35	.24	.11	.08	.46	.17	.33	.23	.06	.24	.46	.22	.39
6 友人が何とも思わないということ（もの）に対し，自分は悲しいと思っているとき，私は自分の悲しみを表さない．	.10	.18	.17	.48	.06	.31	.10	.13	.17	.56	.06	.39	.25	.06	.20	.30	.05	.21
9 友人が好きだとと言うこと（もの）に対し，自分は嫌いなとき，私は嫌いな気持ちを表さない．	.29	.13	.15	.44	.02	.33	.29	.14	.16	.41	.00	.31	.39	.24	.18	.55	.08	.42
10 友人がとても怒っていること（もの）に対し，自分はそれほど怒りを感じていないとき，私もかなり怒っているように表す．	.28	.19	.12	.20	.68	.65	.27	.19	.15	.17	.74	.72	.18	.25	.06	.21	.61	.52
9 友人がとてもイライラしていること（もの）に対し，自分はそれほどでもないとき，私もかなりイライラしているように表す．	.27	.28	.06	.19	.68	.66	.29	.26	.08	.18	.63	.60	.28	.21	.04	.18	.76	.75
二乗和	2.19	2.17	1.76	1.41	1.14	8.67	2.15	2.08	1.81	1.39	1.18	8.61	2.33	2.10	1.86	1.55	1.25	9.09
寄与率（%）	10.43	10.33	8.38	6.71	5.43	41.29	10.24	9.90	8.62	6.62	5.62	41.00	11.10	10.00	8.86	7.38	5.95	43.29

注）F1は「人方美人的制御」，F2は「非攻撃志向的制御」，F3は「自己抑圧的制御」，F4は「同調のための抑制的制御」，F5は「同調のための強調的制御」を指す．

3 因子はやりとりの相手の友人に対する自分のネガティブ感情表出の抑制であるのに対し，第4因子は相手の友人に対する自分の感情ではなく，相手の友人の感情に同調するために自分の感情表出を抑制しているため，「同調のための抑制的感情表出の制御」と命名する。以下「同調のための抑制的制御」と命名する。

・第5因子：やりとりの友人の中の感情に対し，自分はそれほど感じていないのに，友人に合わせるため自分も同じぐらい感じているように強めて表す内容から構成されている。友人がある対象に対し強いネガティブ感情を表出することに同調するために自分の感情を強調する表出を行っているため,「同調のための強調的感情表出の制御」と命名する。以下「同調のための強調的制御」と命名する。

さらに中学生と高校生に対し,感情表出の制御21項目に対し因子分析を行った結果，全体，中学生および高校生の感情表出の制御の因子構造は類似しており，この5因子は中学校から高校生にかけて比較的安定しているものと考えられる。

Fig.2-1に示されているように，第1因子を除く他の4つの因子は感情の起因場所に分かれているのに対し，第1因子の「八方美人的制御」は表出の制御を行う感情が友人に対し自分の中で生じている場合と，友人の感情に対する自分の感情の場合の両方が一緒になって一つの因子となっている。また，第2因子の「非仲間志向的制御」の場合は，友人に対するポジティブ感情は抑制し，ネガティブ感情は強調することで，感情表出の制御の方略が2つのパターンに分かれている特異なタイプである。また，悲しさの表出の制御は第2因子と5因子ではなく，第1因子の喜びと好感のような「ポジティブ感情の強調化」と一緒になっていることも注目される。悲しさはネガティブ感情のなかでも比較的弱い感情であり（Shaver, Schwartz, Kirson, & O'connor,

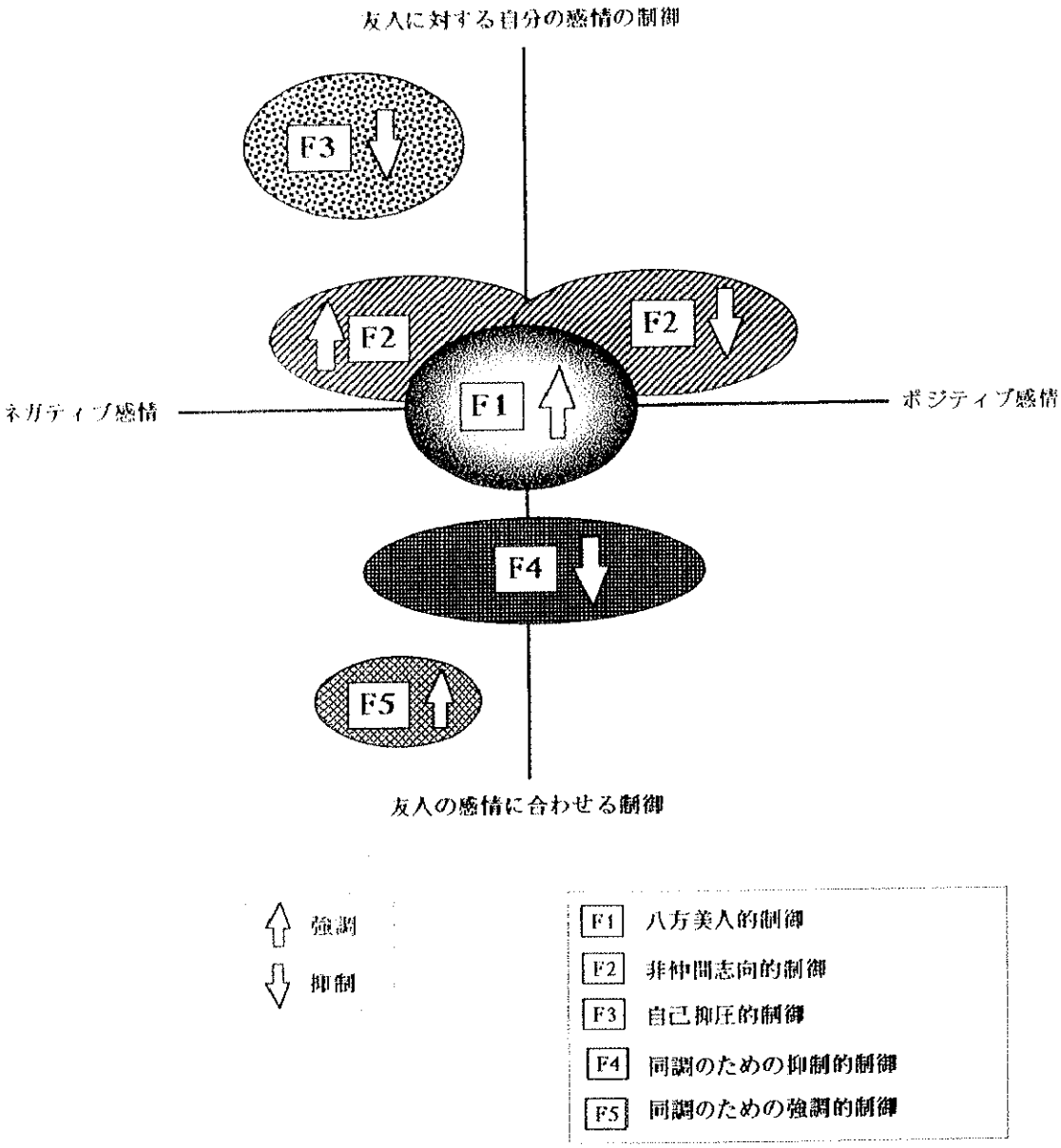

Figure 2-1　感情表出の制御の感情の種類，方略および生起場所別分類

1987），日本人において悲しさの表出は，場合によってはネガティブ感情としての働きが弱い可能性が考えられる。

(2) 下位尺度の平均（SD）と信頼性の検討

(a) 中学生の結果

Table2-5には中学生の下位尺度ごとの平均値，標準偏差，下位尺度間相関，性差，α係数による信頼性係数が示されている。感情表出の制御尺度の内的一貫性を検討するためのクローンバックのαの値は,.67~.78 であり，まずまずの内的一貫性が認められたと言えよう。下位尺度間相関を見ると，第2因子と第3因子間および第3因子と第5因子間に低い相関が示され，その他の下位尺度間に中程度の相関が見られた。「非仲間志向的制御」（第2因子）と「自己抑圧的制御」（第3因子）は，性質の異なる側面を持っていると思われる。また，「自己抑圧的制御」は経験しているネガティブ感情を表出しないのに対し，「同調のための強調的制御」（第5因子）は経験していない強いネガティブ感情を表わすことということで違いが現われていると思われる。

次に性差を調べるために t 検定を行った結果，第1因子と第3因子は女子が男子より得点が高く，第2因子と第4因子は男子が女子より得点が高いという結果であった。すなわち，女子が男子より「八方美人的制御」（第1因子）と「自己抑圧的制御」（第3因子）を多く行い，男子が女子より「非仲間志向的制御」（第2因子）と「同調のための抑制的制御」（第4因子）を多く行うことが示唆された。女子は相手に悪い印象を与えないように相手に対するポジティブ感情は強く，ネガティブ感情は抑えて表わすことであり，八方美人的な制御と自己抑圧的な制御を行うことによって，相手と穏やかな関係を維持しようとする様子がうかがえる。その反面，男子が女子より多く

Table 2-5　中学生の感情表出制御の全体および各因子ごとのα係数，平均値 (SD)，因子間相関係数および性差

因子名	α係数	平均 (SD)	F 2	F 3	F 4	F 5	性差		
							男子		女子
八方美人的制御 (F1)	.75	2.78 (.84)	.30 **	.45 **	.50 **	.48 **	2.73	<	2.83
非仲間志向的制御 (F2)	.72	2.07 (.81)	—	.16 **	.33 **	.40 **	2.15	>>>	1.98
自己抑圧的制御 (F3)	.71	2.94 (1.02)	—	—	.37 **	.27 **	2.81	<<<	3.08
同調のための抑制的制御 (F4)	.67	2.60 (.92)	—	—	—	.40 **	2.69	>>>	2.48
同調のための強調的制御 (F5)	.78	2.32 (1.12)	—	—	—	—	2.28		2.34
全体		2.56 (.65)	—	—	—	—	2.55		2.56

注 1）各因子は，実際は下位尺度であるが，便宜上，上のように表記する。

2）**p<.01

3）>>はt検定による有意水準（>：p<.05，>>>：p<.001　）

行う「非仲間志向的制御」は，結局友人に対しポジティブ感情は表わさず，ネガティブ感情ばかり表わすことになる。一般的な男性の性役割意識から考えると，男子が友人に「おまえのこういうところが好きだ」とか「おまえのこの言葉が嬉しかった」というふうに表現するのは，「男はたくましく振る舞うべきで，重みがなければならない」という従来の男性性のイメージに反することであり，女々しいという考え方が背景にあるのではなかろうか。

(b) 高校生の結果

Table2-6 には，高校生の下位尺度ごとの平均値，標準偏差，下位尺度間相関，性差，クローンバックのα係数による信頼性係数が示されている。まず，α係数が,.65~.77 であり，中学生と同様，まずまずの内的一貫性が認められた。下位尺度間相関を見ると，第1因子と第2因子間，第2因子と第3因子間，第2因子と第4因子間，第3因子と第5因子間に弱い相関が示された。その他の下位尺度間には中程度の相関が示された。高校生の場合は第2因子の「非仲間志向的制御」が他の因子とは異なる性質を有していることが考えられる。

次に性差を見てみると，第2因子と第4因子において男子が女子より得点が高く，感情表出の制御を多く行うという結果であった。この結果は中学生と同じ結果であり，中学生・高校生ともに「非仲間志向的制御」と「同調のための抑制的制御」は男性的な感情表出の制御であることが示された。

2. 新版「感情表出の制御尺度」の妥当性の検討［研究2-2］

目的

Table 2-6　高校生の感情表出制御の全体および各因子ごとのα係数，平均(SD)，因子間相関係数および性差

因子名	α係数	平均(SD)	F2	F3	F4	F5	性差		
							男子		女子
八方美人的制御(F1)	.75	2.68 (.80)	.18 **	.33 **	.40 **	.42 **	2.66		2.68
非仲間志向的制御(F2)	.74	1.83 (.75)	—	.11 *	.27 **	.36 **	2.00	>>>	1.64
自己抑圧的制御(F3)	.73	2.97 (1.02)	—	—	.37 **	.17 **	2.91		3.04
同調のための抑制的制御(F4)	.65	2.42 (.87)	—	—	—	.38 **	2.55	>>	2.29
同調のための強調的制御(F5)	.77	1.98 (.97)	—	—	—	—	1.96		1.99
全体		2.41 (.58)	—	—	—	—	2.46	>	2.35

注1) 各因子は，実際は下位尺度であるが，便宜上，上のように表記する。

2) *p<.05，**p<.01

3) >>はt検定による有意水準（>：p<.05，>>：p<.01，>>>：p<.001　）

研究2-1で作成された感情表出の制御尺度の構成概念的的妥当性を検討する。

方法

被調査者　首都圏の2公立高等学校，合計132名（男子65名，女子67名）に感情表出の制御と対人不安意識尺度が実施され，別の公立高等学校，合計190名（男子91名，女子99名）に感情表出の制御と精神的健康尺度が実施された。さらに，別の公立高等学校，合計111名（男子65名，女子46名）に感情表出の制御と自意識尺度が実施された。これらの高校の学力のレベルは「中の上」と思われる。

調査内容

(a) 感情表出の制御尺度：研究2-1で得られた結果から21項目が用いられた。

(b) 対人不安意識尺度：林・小川（1981）が作成した一般人の対人恐怖的傾向を測定する尺度で，全66項目，12下位尺度の中から，最も感情表出の制御との関連性が深いと考えられる「対人関係で緊張する悩み」と「自分や他人が気になる悩み」のそれぞれ7項目ずつ使用した。7件法を採用しており，「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの7段階に対し，7点～1点を与えた。林・小川（1981）より妥当性が検証されている。

対人不安が高い人は対人関係に自信がないため，自分をありのまま表すことができず，感情表出の制御を多く行うことが予測され，正の相関が見られるであろう。

(c) 精神的健康：松原・会沢（1991）が作成した計35項目，5下位尺度からなる精神的健康に関する質問紙で，5件法で評定した。「当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階に対し，5点～1点を与えた。精神

的健康の下位尺度のなかで，自己主張や自己表現，自己受容と自信，自己志向と感情表出の制御の間に負の相関が見られるであろう。

(d) 公的・私的自意識：菅原（1984）が自分自身のどの側面にどの程度注意を向けやすいかを測定するために作成した尺度である。公的自意識が 10 項目，私的自意識が 11 項目から構成されており，7 件法で評定した。「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの 7 段階に対し，7 点～1 点を与えた。菅原（1984）により信頼性および併存的妥当性が検証されている。公的自意識と感情表出の制御との間に正の相関が見られるであろう。

調査方法　研究 2-1 と同様，各学級で HR の時間または授業時間に一斎に行われた。しかし，一部の学校に対しては，授業時間などの都合で，自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

(1) 感情表出の制御の妥当性の検討

調査 1 で作成された感情表出の制御の構成概念的妥当性を検討するために，対人不安意識，精神的健康，自意識との相関を求めた。その結果が Table2-7 に示されている。まず，対人不安意識（対人関係で緊張する悩み，自分や他人が気になる悩み）との相関係数において，中程度の値が得られた。すなわち，感情表出の制御を多く行うことと対人不安意識が高いということは相関があるという結果で，対人関係の中で緊張してしまったり，自分のしぐさや行動または他人に嫌われていないのかなどを気にする人が，自分の気持ちとは関係なく友人に合わせて自分の感情表現を強めたり，抑制したりすることや，友人の機嫌をとるために，友人によって生じたネガティブ感情を抑制し

Table 2-7　感情表出の制御と対人不安意識，精神的健康および自意識との相関係数

		F1	F2	F3	F4	F5	全体
対人不安	対人関係で緊張	.33 ***	.19 *	.35 ***	.34 ***	.28 ***	.45 ***
	自分や他人が気になる	.43 ***	.12	.26 **	.28 ***	.34 ***	.45 ***
精神的健康	過去からの解放	-.09	-.05	-.06	-.11	.04	-.13
	自己受容と自信	-.25 ***	-.18 *	-.14 *	-.14 *	-.05	-.26 ***
	自己主張と自己表現	-.12	-.08	-.35 ***	-.43 ***	.07	-.31 ***
	自己志向	-.22 **	-.11	-.29 ***	-.32 ***	-.05	-.32 ***
	積極的人生観	-.23 **	-.25 ***	-.08	-.26 ***	-.16 *	-.30 ***
自意識	公的自意識	-.09	-.03	-.08	.10	-.02	-.06
	私的自意識	.10	.03	.04	.07	.01	.10

注 1）F1 は「八方美人的制御」，F2 は「非仲間志向的制御」，F3 は「自己抑圧的制御」，F4 は「同調のための抑制的制御」，F5 は「同調のための強調的制御」を指す。

2）*p<.05，**p<.01，***p<.001

たり，友人に対するポジティブ感情を強調して表すことが多いという結果であろう。

感情表出の制御全体と精神的健康との相関関係を求めたところ，弱い負の相関が見られた。特に下位尺度の中でも自己主張と自己表現及び自己志向において，第3因子の「自己抑圧的制御」と第4因子の「同調のための抑制的制御」において中程度の負の相関関係があることが示された。この結果は，感情表出の制御の2つの方略である強調化と抑制の中でも，抑制を多く行う人は自己主張や自己表現が低く，自己志向が低いということを表しており，尺度の妥当性を示すひとつの結果であった。

最後に自意識との相関関係を求めたところ，公的自意識や私的自意識のどれとも有意ではなかった。場面想定式の質問紙を用いた崔（1997）の研究でも類似な結果が見られ，感情表出の制御と公的自意識との間に正の相関が見られたものの.17~.20の低い相関であった。この2つの研究結果からは感情表出の制御と自意識とはほとんど関連性が見られないということになる。この自意識尺度は Fenigstein, Scheier, & Buss（1975）が自意識の強さを測定するために作成しており，その中の1つは，自分の服装や他者に対する言動など他者から直接観察できる自己の側面に注意を向けやすい程度を測定する公的自意識であり，もう1つは自分の内面や感情など他者から直接観察されない自己の側面に注意を向けやすい程度を測定する私的自意識である。今回の結果からは，他者から観察できる自己の側面に注意を向けやすい人は，他人からの評価を気にはしても，他人に合わせて自分を表現したり，自分を抑えたりすることは少ないことが考えられる。それと比べて，他人からの評価に心配と不安を持っており，どう行動していいかわからなくて，対人関係に緊張したり硬直するような対人不安の場合が，感情表出の制御と一定の関連性を持つのである。

これらの結果を総合して考えると，感情表出の制御を多く行うことが低い自己主張や自己表現および低い自己志向と関連し，対人関係においては緊張しやすく，自分と他人が気になることと関連するということは，納得のいく結果である。今回の感情表出の制御の尺度の構成概念的妥当性が検証されたと言えよう。

研究2の要約

本研究では，感情の種類，感情表出の制御方略，感情がどこに生起しているのか（やりとりの相手の友人か第3者か）の3つの次元の組み合わせによって，尺度を作成した。因子分析，信頼性，妥当性の検討の結果，本尺度は中学生と高校生の青年期の生徒の感情表出の制御を測定するのに有効であることが明らかにされた。また，中学生と高校生の感情表出の制御の性差についての検討も行われた。

第3節　第2章のまとめ

第2章では，青年の感情表出の制御を測定する尺度を作成することを目的とした。そのために第1節では，大学生を対象に「感情表出の制御を行った経験」について尋ね，感情表出の制御を行う多様な場面を収集した。その基礎資料を基に，ネガティブ感情表出の制御を測定するために質問紙を作成した。その内容的構造は動機と場面を中心に分類され，「物理的被害場面での向社会的動機」，「言語的被害場面での向社会的動機」，「友人の不幸経験場面での向社会的動機」，「友人の幸福・満足と関わる場面での向社会的動機」および「体面の気になる場面での自己保護的動機」の5つの側面が示された。

第2節では，研究1で示唆された問題点を踏まえ，1）具体的な場面を提示しないで，各自の自由な想定ができ，2）感情がどこで生起しているのかを意識した「感情表出の制御」項目を作成し，その信頼性および妥当性が検証された。

これらの結果から，青年期の人を対象とする，信頼性と妥当性のある「感情表出の制御」尺度を作成しようとした第2章の目的は，概ね達成されたと言える。